

西表島における戦後宿泊施設の概略史

A brief history of inn in Iriomote Island after World War II

園 原 謙

沖縄県立博物館

KEN SONOHARA

1 はじめに

西表島は沖縄県下で沖縄島に次いで2番目に大きな島である。手つかずの豊かな自然が残されているため、「日本のアマゾン」または、「東洋のガラパゴス」とも称される。

近年の島嶼地域の過疎化現象は顕著で、少子化も手伝って、各島行政担当者は人口の確保に躍起になっている状況下にある。現在、竹富町は西表島をはじめ波照間島、黒島、小浜島、竹富島、上地島、下地島、鳩間島、由布島の9つ有人島を有し、平成12年11月末現在3,634人（世帯数1,763）の人口を擁する。ここ10数年の人口推移をみると、意外ではあるが、過疎化の状況はなく、全体としてはむしろ増加傾向にある。その理由のひとつに、町内最大の人口を擁する西表島の人口増が要因となっていることをあげることができる。『平成10年度版竹富町勢要覧』によると、同島の人口は平成2年度が1,712人（685世帯）に対し、平成7年度には1,893人（782世帯）となっている。人口で181人、世帯数で97世帯の増となっている。また、平成12年度には（平成12年11月末現在）では2,007人、965世帯となり、5年前の平成7年度に比べると人口で114人、世帯数で183世帯の増となっている。

本稿では、過去に同島に旅行者として宿泊施設を利用したり、従業員（ペルパー）として従事した人々の一部がリピーターとして再び西表島に出入りするうちに、同島に移住・定住する傾向にあることが人口増加の要因のひとつであることに着目してみた。その契機を提供するものひとつである同島内の宿泊施設に注目し、同島における宿泊施設の設置状況や推移について概観し、西表島における宿泊施設の役割や人口増に関わる社会的な要因などについて考察を試みたい。

2 宿泊施設の起源について

我が国における宿泊施設の起源について佐々木日嘉里氏は次のように述べている。

旅館設備の起源は大化改新で確立した駅制により設置された各駅の駅舎、厩舎に始まる

とされる。これは公用の官吏のための宿泊、給食施設であり、私用の旅行では庶民同様、草行露宿のありさまであったといわれる。

奈良時代、僧行基は慈善事業として交通の要所に布施屋を設置し、下層旅行者の無料休泊施設とした。平安時代には、旅行中の病人、餓死者のために悲田処、続命院、救急院なども置かれたが数が少なく、草枕の文字どおり苦しい旅であったことが、『更級日記』『信貴山縁起』などから伺える。院政時代には熊野参詣が盛行し、旅宿が発達した。鎌倉時代には熊野詣で、伊勢詣ではさらに盛んになり、庶民のための宿坊、宿院などの休泊所が現れた。駅制は荘園や海運の発達により衰退していたが、源頼朝が宿駅の制を施し再度発達した。駅には館が設置され、また商業の発達に伴い庶民の宿も営業された。これは木銭を支払い携行食糧の炊事を自ら行うもので、江戸・明治に至っても木賃宿として存在した。室町及び戦国時代、軍事上の必要から駅制は発達し、商業の著しい発達や社寺参詣の流行により庶民の行旅も増え、宿は次第に街村をなし旅籠が発生した。

江戸時代、太平の世になり宿駅制が全国統一されると、交通の往来が盛んになり宿駅は繁栄し、本陣、旅籠などの宿場町が形成された。本陣は、特権者や外国人用の宿泊所で、室町時代に足利義詮が上洛の際「本陣」と宿札を掲げたことから始まるとされるが、機能を発揮したのは参勤交代制以後である。門、玄関、上段の間を備え、経営者は苗字帯刀を与えられた。そのほか脇本陣、御小休本陣などもあり、目的により使い分かれた。しかし、幕末に諸侯の財政破綻、参勤交代制の緩めから衰微し、1870年（明治3）本陣廃止令により廃止された。

一方、庶民の宿舎として発達した旅籠は、「馬糧入れの籠」を意味したものが転じて旅館に用いられ、宿料は湯を沸かす木銭が基準となっていた。17世紀には、旅人が米を携帯する労苦を省き、木銭、米代、宿泊を宿料とするようになった。江戸文化が高度に発展して文化文政時代（1804-30）には旅籠は急速に発達し、宿泊と食事を提供するようになり、飯盛（宿場女郎）を置くところも多かった。しかし明治以後、鉄道交通の発達により駅に繁華街が集中すると宿場町はしだいにさびれ、旅籠は旅館やホテルに変わっていくことになった。

また、西洋における宿泊施設の起源についても以下のように歴史的経過を述べている。

古代エジプト、バビロニア時代には相当範囲の交易が行われており、バクダートとバビロンをつなぐ隊商路には早くから宿泊所が発達していた。ギリシャ時代には、集会や宿泊のための公共施設レスケがあり、のちに外国人宿泊所パンドケイオンも発生した。ローマ時代になると、アウグストゥスにより広範囲な領土統制のため道路網が建設され、駅通制に従い道路沿いに宿駅が置かれた。これは官吏や軍人の宿泊、物資の輸送などにあてられたが、一般の旅行も頻繁になり民間営業の宿泊所も生じた。例えば、厩のついたスタブル

ム、内風呂をもつデウエルソリウム、下級階層者用のカウポナ、飲食店と酒場を兼ねたタベルナ、一品料理店を兼ねたポピナなどの宿屋がみられた。しかし中世に入ると、交通は殆ど途絶し、宿屋も衰退した。唯一、庶民の巡礼が旅行活動となり、僧院や修道院が無料宿泊所にあてられていた。十字軍遠征が始まると、大量の物資や行軍が往来し、営利的宿屋も発達し始めた。当時は食物、燃料、寝床などは宿泊者自身が用意するのが一般的であったらしい。ルネサンス期に宿屋は興隆を迎え、インとよばれる酒場を兼ねたものが現れ現代のホテルの原形となった。17世紀半ばに馱馬車が現れると、旅行者は増え、19世紀半ば、産業革命の結果、鉄道交通が発達すると新たな旅行動態が生まれ、これに伴い近代的施設をもつホテルが急速に発達し、現代都市における大規模なホテルの起源となった。

3 法律に規定される我が国の宿泊施設

戦後、わが国には宿泊施設に関する許認可を扱う法律として旅館業法（1948年）、国際観光ホテル整備法（1949年）が制定された。この法律でいう「旅館業」は4つの営業形態に分かれて規定される。すなわち、ホテル営業、旅館営業、簡易宿所営業、下宿営業である。ここでは、ホテル、旅館、民宿・ユース・ペンションといった簡易宿所についてその起源や営業形態などの特徴を記しておきたい。

①ホテル

近代設備と、行き届いたサービス機能を備えた高級宿泊施設のことで、我が国では旅館業法と国際観光ホテル整備法によって、ホテルは洋式、旅館は和式と一応区分されているが、明確にホテル、旅館の名称を区別する法的規制がないため、和式旅館でホテルの名をつけているのも多く、名称だけでは区別できない現状にある。

そもそもホテルの語源は、宿館、豪邸や公共の建物をさした古いフランス語hostelからきており、フランスのベルサイユにオテルhôtelとよぶ宿泊施設が現れたのは18世紀後半であったという。hostelからs音が消えたホテル（フランス語ではオテル）という語が高級宿泊施設の汎称として用いられるようになったのは、この頃と見られている。

日本では1688年（元禄1）長崎から江戸へ入るオランダ人を宿泊させるため、江戸本石町に洋風の旅館長崎屋が建てられたのを、ホテルの嚆矢とする説と、純洋式ホテルとして1868年（慶応4）東京築地に開業したホテル館（築地ホテル館）が最初と考える説がある。築地ホテル館は約2万3千平方メートルの敷地に103室を備えた。1878年（明治11）箱根に建てられた富士屋ホテルが成功を収めリゾートホテルの先駆けをなし、1890年には東京に帝国ホテルが建設された。同ホテルは創設当初はルネッサンス風の木骨3階建てであったが、1923年（大正12）アメリカ人建築家ライトの設計によって全面的

に立て替えられ、日本を代表する都市ホテルとなった。これらホテルは庶民に届かない富裕階級や外国人のための高価な宿泊施設であった、とされる。

日本のホテルの大衆化は、1964年（昭和39）の第18回オリンピック東京大会を契機として起こったホテル建設ブームが大きく寄与したといわれる。高度経済成長政策による日本人の富裕化にも支えられ、ホテル業は順調な発展をとげ、70年代、80年代と三度の建設ブームを経て、地方都市、観光地にも多くのホテルが開業し、料金は低価格化にも成功し、大衆の宿泊施設との地歩を固めるに至った。

②旅館

旅行者が料金を払って食事・宿泊する施設。原則として客室の構造及び設備が和式のものが旅館とされる。

旅館は和式の構造及び設備を主とする施設を設け、宿泊料を受けて、人を宿泊させる営業で、簡易宿所営業及び下宿営業以外のものをさしている。営業許可は、都道府県知事が与える。許可基準には、旅館の設置場所、構造、設備などの諸点が規定されているが、地方によって差異がある。旅館業法施行令による旅館の基本的設備基準では、客室の数は5室以上であり、和式の構造設備による客室の面積は7平方メートル以上となっている。また、洋式の客室を全体の3割までもつことができるが、この場合、洋式の客室の面積は9平方メートル以上の規模がなければならない。設備として、原則的に洗面所、便所、浴室、防火、換気、採光、照明、防湿、排水などが整備される必要があるが、近接して公衆浴場がある場合には、入浴設備がなくてもよい。国際観光ホテル整備法による旅館とは、外国客の宿泊に適するようにつくられた施設であり、ホテル以外のものをさし、いっそう高度な規定がある。旅館施設は、このほかに建築基準法、消防法、労働基準法、食品衛生法、公衆浴場法などの法規ならびに各都道府県の定める規定の制約を受ける。火災に対する消防設備基準の厳守はとくに重要となっている。

③簡易宿所

旅館業法では、宿泊する場所を多数人で共用する構造及び設備を主とする施設を設けて人を宿泊させる営業でホテル、旅館、下宿以外のものを簡易宿所営業とよんでいる。その宿所の実態は、「民宿」、「ペンション」、「ユースホステル」の名称で親しまれる。

1 民宿

民宿とは、「一般民家が許可を得て副業的に営む簡単な宿泊施設のことで、安い宿泊料で家庭的なサービスの特徴とする」施設と規定される。民宿は本来的にその生業にあったのではなく、冬季のスキー場や夏季の高原、海水浴場などで宿をとれなかった利用者側が、

一般民家に頼み込んで一夜の宿を借りる形から始まった、といわれる。

営業は都道府県知事が公衆衛生の保持と、風俗を乱さないことを条件として許可するが、設備の規準は客室の延べ面積が33平方メートル以上であることが第一の条件で、その他についてはホテル、旅館に比べて規制も緩やかである。大別して季節民宿と通年民宿があるが、季節民宿はスキー客や海水浴客を対象としたものが多い。

民宿の魅力は、宿泊料が免税点（1984年現在5,000円）以下で設定されているため、きわめて安く泊まれること、自宅を提供した家族が接客にあたること、農漁業を兼業しているところでは、自家用の新鮮な魚貝、野菜が家庭的な味付けともてなしで食膳に供されること、などである。しかし、民宿の増加とともに、これを専業とするのも増えているので、かならずしも民宿本来のよさに出会えるとは限らない。

2 ペンション

ペンションとは、もともとは家庭的な小ホテルのことで、ヨーロッパでは主として住居の空き室を利用し、副業的に家族が経営した簡易な食事付きの宿泊施設であったが、現在では家庭的なよさを残しながら殆ど専業化している。我が国では1972年（昭和47）の日本ペンション協会設立以来増え始め、ホテル形式のサービス・設備と安価な宿泊料が好まれて、急速に発展してきた経緯がある。大別して都市型とリゾート型に分類でき、リゾートを中心に国内で約2,200軒が営業しており、ほぼ半数が日本ペンション協会、日本ペンションオーナーズクラブ、日本ペンション連盟など10団体のいずれかに所属している。

3 ユース

「ユース」とは、本来的にはユースホステルのことをいう。この施設は青少年が健康な野外活動をするために簡易質素な宿泊施設としてのホステルを活動拠点として、積極的に自然に親しむ運動をいい、狭義にはその宿泊施設をよぶ。20世紀に入り、ウォルフ・マイネンによって始められたワンダーフォーゲル運動と結合して、1909年リヒャルト・シルマンがユーгентヘアベルゲ（青少年宿泊所）の建設運動を始めたことから世界に広まり、1987年現在53か国に建設され、日本では1951年（昭和26）日本ユースホステル協会が結成され、公営・私営を含め488（1986）の施設が全国に建設されている。ユースホステルには旅行ホステルと休暇ホステルがあり、後者はさらに、夏季、冬季、週末、都市など、利用形態によって分けられる。ホステリングは、ホスピタリティ（親切心）を基調にして奉仕と友愛の精神で自主的に協同生活を行いながら秩序と規律を守り、国際性をもった活動をしていくことが中心である。ホステル内の活動はすべてセルフサービスである。

4 西表島の宿泊施設の現況について

以上の宿泊施設の歴史的経緯や現在の法律上で規定される宿泊施設の形態を踏まえて、西表島の宿泊施設の現況をみてみよう。同島の宿泊施設の情報を提供するヤシガニNET作成のホームページ（平成12年末）掲載されている施設をもとに、筆者が調査した施設を加えると、表1のとおり45の宿泊施設が西表島にはある。その収容人数の総計は1,231人になる。また、旅館業法に規定される宿泊施設の種別毎の内訳では、ホテル3施設、旅館4施設、法律上は「簡易宿所」と呼ばれる民宿25施設、ペンション11施設、ユース2施設がある。

この一覧から圧倒的に民宿が多いことがわかる。民宿の収容人員の総数は、675人、ペンション246人、ホテル107人、旅館105人、ユース98人となっている。民宿は収容人員数においては全体の57%を占めている。次ぎにペンションが20%と続く。

各集落の宿泊施設の設置状況は図1の西表島の集落毎宿泊施設設置状況図（注1）のとおりである。この図から西表島を東部と西部に分けた場合、宿泊施設が西部地区に多く東部地区には少ない実態が浮き彫りになる。

筆者は、2000年1月18日から20日まで2泊3日で西表島の宿泊施設実態調査を実施した。時間の範囲内で個々の施設を訪ね関係者に質問した。また、後に電話で補足調査を行った。調査内容は次のとおりである。①創業年、②部屋数、③最大収容人員、④従業員数（オーナーを含め）、⑤繁忙期のヘルパー数、⑥建物の構造、⑦その他客層の傾向などである。筆者が直接の聞き取りや電話による調査結果を表2・集落毎宿泊施設一覧としてまとめた。

この一覧から創設年に注目して作成したのが図2である。戦後西表島における宿泊施設の設置状況を5年間隔でまとめてみたものである。70年代前半と80年代にかけて、多くの宿泊施設の設置状況が確認できる。この図から日本復帰を契機に沖縄の秘境・西表島の宿泊需要は高まったことが伺え、その結果として来島者に対する宿所の供給状況を把握することができる。

宿泊施設の種別ごとの創設状況をみると、旅館が先行していることが分かる。また、簡易宿所を代表する民宿は、72年の日本復帰を契機に拡大していく傾向もみてとれる。ペンションという宿所形態は80年代に設置されはじめる。そして、大きな資本力が求められ高級なイメージをもつホテルという形態は80年代後半から90年代前半にかけて設置される。

表1 ヤシガニNET作成のホームページ掲載等の西表島の宿泊施設（平成12年末）

民宿（25件）

No	宿泊施設の名称	住所 沖縄県竹富町西表島	電話番号 (09808)	収容 人数	備 考
1	民宿パイナップル館	上原10-171(西部)	5-6408	45	ホームページで紹介
2	民宿あけぼの館	上原397-1(西部)	5-6151	25	ホームページで紹介
3	民宿南風荘	南風見201-37(東部)	5-5356	16	ホームページで紹介
4	民宿ヒナイビーチ	上原870-91(西部)	5-6254	45	ホームページで紹介
5	民宿さわやか荘	上原10-448(西部)	5-6752	38	ホームページで紹介
6	民宿カンピラ荘	上原545(西部)	5-6508	30	ホームページで紹介
7	民宿マリウド	上原984-14(西部)	5-6578	36	
8	民宿西部荘	上原870(西部)	5-6257	13	
9	民宿サンゴ荘	上原572-1(西部)	5-6367	8	
10	民宿きよみ荘	上原872(西部)	5-6251	30	
11	民宿うえはら館	上原559(西部)	5-6516	60	
12	民宿まるま荘	上原527(西部)	5-6156	18	
13	民宿ミネイ館	上原870-3(西部)	5-6506	20	
14	民宿おやかかわ荘	上原330-2(西部)	5-6466	20	
15	民宿ふるさと荘	上原10-199(西部)	5-6750	10	
16	民宿うなりざき荘	上原10-172(西部)	5-6146	60	
17	民宿星砂荘	西表657(西部)	5-6150	30	
18	民宿ふくぎ荘	西表635(西部)	5-6353	17	
19	民宿ふなうき荘	西表2458(西部)	5-6161	23	
20	民宿かまどま荘	西表2463(西部)	5-6165	20	
21	民宿池田屋	南風見201-116(東部)	5-5255	15	
22	民宿大原荘	南風見201-70(東部)	5-5155	15	
23	民宿なみ荘	南風見201-60(東部)	5-5257	30	
24	民宿みどり荘	上原572-5(西部)	5-6526	39	※
25	民宿鳴海荘	西表614(西部)	5-6164	20	※

ペンション (11)

26	ペンションBUFF	上原397-1(西部)	5-6407	15	ホームページで紹介
27	ペンションふあなはうす	上原984-1(西部)	5-6715	16	ホームページで紹介
28	ペンションくまのみ	上原870-95(西部)	5-6255	18	ホームページで紹介
29	ペンションわいんどふぁー夢	上原661(西部)	5-6653	30	
30	マリンロッジアトク	上原750(西部)	5-6356	14	
31	ペンションイリオモテ	上原750(西部)	5-6555	16	
32	ペンション星の砂	上原289-1(西部)	5-6448	22	
33	ペンション住吉荘	上原10-186(西部)	5-6358	22	
34	ペンションなかがわ	南風見仲29-37(東部)	5-5407	12	
35	マリンペンションたいら	上原564(西部)	5-6505	30	※
36	VILLA UNARIZAKI	上原750(西部)	5-6464	27	※

ホテル (3)

37	ブチホテル・マヤグスクリゾート	上原10-544(西部)	5-6190	12	ホームページで紹介
38	西表アイランドホテル	西表634(西部)	5-6001	60	
39	西表コナツツヴィレッジ	上原397-1(西部)	5-6045	35	

旅館 (4)

40	旅館金城	西表1499(西部)	5-6351	21	ホームページで紹介
41	みはらし旅館	上原870(西部)	5-6537	30	
42	竹盛旅館	大富36-5(東部)	5-5357	24	ホームページで紹介
43	あずま旅館	南風見201-146(東部)	5-5268	30	ホームページで紹介

ユース (2)

44	ユースみどり荘	上原572-5(西部)	5-6526	32	ホームページで紹介
45	ユースいるもて荘	上原870-95(西部)	5-6255	66	ホームページで紹介

※筆者が調査して追加した施設

表2 集落毎の調査宿泊施設一覧

大原									
名称	種別	創業年	部屋数	収容人	従業員	ヘルパー	構造	摘要	
1	池田屋	民宿	1986年	7	15	3	0	木造・RC造	官公庁関係者、大学生(7-8月)
2	大原荘	民宿	1977年	5	15	1	0	RC1F	旅館業から移行
3	なみ荘	民宿	1974年	12	30	2	0	RC2F	1996年改築、7-8家族連れが多い
4	南風荘	民宿	1982年	8	16	2	0	RC2F	
5	あずま旅館	旅館	1969年	12	30	2	2	RC2F	4月-8月夏場を中心に多い
合計				44	106	10	2		
船浦									
6	西郷荘	民宿	1973年	5	13	1	0	RC2F	素泊、ゴールデンウィーク、顧客が多い
7	マリウド	民宿	1985年	13	36	2	5	ブロック・トタン	夏場の常連客が多い
8	ヒナイビーチ	民宿	1993年	16	45	2	2	RC2F	夏場ヘルパー雇用
9	ふあなはうす	ペンション	1989年	7	16	2	1	RC2F	冬場1月~2月休、顧客多い
10	ペンションくまのみ	ペンション	1984年	6	18	1	-	RC1F	
11	いるもて荘	ユース	1976年	17	66	1	5	RC2F	
12	みはらし旅館	旅館	1964年	14	30	1	1	RC2F	72年に現在地に移築。当初は民宿を設置。
合計				78	224	10	14		
上原									
13	カンピラ荘	民宿	1972年	20	30	2	7	RC2F	常連客、フリー客が多い
14	うえはら館	民宿	1966年	27	60	2	7	RC2F	1972後改築、家族連れや合宿・修学旅行者
15	きよみ荘	民宿	1972年	20	30	1	3	RC2F	家族連れが多い
16	サンゴ荘	民宿	1979年	3	8	1	0	RC1F	
17	まるま荘	民宿	1982年	9	18	2	1	RC1F	
18	ミネイ館	民宿	1982年	9	20	2	1	RC1F	県外ヘルパー2人か現地で結婚した。
19	わいんどふあー夢	ペンション	1989年	7	30	3	1	RC2F	20年前にカンピラ荘に滞在したことから虜になる。
20	マリンペンションたいら	ペンション	1975年	12	30	2	2	RC2F	合宿、
21	ユースホステル西表島みどり	ユース	1974年	11	32	2	3	RC2F	
22	みどり荘	民宿	1974年	15	39	2	1	RC1F	レンタカー業も兼務
23	西表コナツヴィレッジ	ホテル	1994年	12	35	2	3	RC2F	
合計				145	332	21	29		
住吉									
24	うなりざき荘	民宿	1970年	20	60	5	1	RC2F	ダイバー顧客が多い、1月から2月OFF
25	さわやか荘	民宿	1988年	15	38	2	3	RC1F	ダイバー顧客、夏場の家族連れ
26	バイナッブル館	民宿	1981年	16	45	2	2	RC1F	ダイバー客多い
27	ふるさと荘	民宿	1988年	4	10	1	0	RC1F	
28	住吉荘	ペンション	1968年	7	22	2	1	RC2F	祖母の代から民宿業を営む。85年に改築
29	ペンション星の砂	ペンション	1980年	17	45	5	10	RC1F/2F	
30	マヤグスクリゾート	ホテル	1994年	2	12	3	0	RC2F	
31	VILLA UNARIZAKI	ペンション	1999年	12	27	2	5	RC1F	ダイビング客多い。
合計				93	259	22	22		
祖納									
32	ふくぎ	民宿	1988年	5	17	1	0	RC2F	素泊まり
33	星砂荘	民宿	1972年	11	30	1	1	木造・RC2F	
34	鳴海荘	民宿	1997年	5	20	1	1	RC2F	
35	西表アイランドホテル	ホテル	1986年	22	60	6	5	RC3F	7月~9月シーズン、大手旅行代理店と提携
合計				43	127	9	7		
船浮									
36	かまどま荘	民宿	1969年	4	15	1	0	RC2F	
37	ふなうき荘	民宿	1977年	5	20	1	0	RC1F	常連客のみ。夏休み期間中のみ営業
合計				9	35	2	0		
大富									
38	ペンションなまがわ	ペンション	1987年	5	12	2	0	RC1F	9割以上が他県からの旅行者
39	竹盛旅館	旅館	1961年	10	24	2	1	RC2F	創設当初は民宿、83年改築、97増築、研究者が多い
合計				15	36	4	1		
浦内									
40	ペンションイリオモテ	ペンション	1981年	5	16	2	0	RC1F	
41	MARINNELODGEアト	ペンション	1987年	6	15	2	2	RC2F	80年頃からダイビングブームが始まる
合計				11	31	4	2		
白浜									
42	金城旅館	旅館	1977年	7	21	1	1	RCF2F	夏場のリピーターが多い。夏場はヘルパー雇用
中野									
43	民宿あまの館	民宿	1982年	7	25	3	0	RC	教員など公務員の客層が多い
44	おやかお荘	民宿	1980年	8	20	3	1	RC2F	
45	シーサイドペンション・パブ	ペンション	1995年	5	15	1	1	RC2F	
合計				20	60	7	2		

図1 西表島の集落毎宿泊施設設置状況

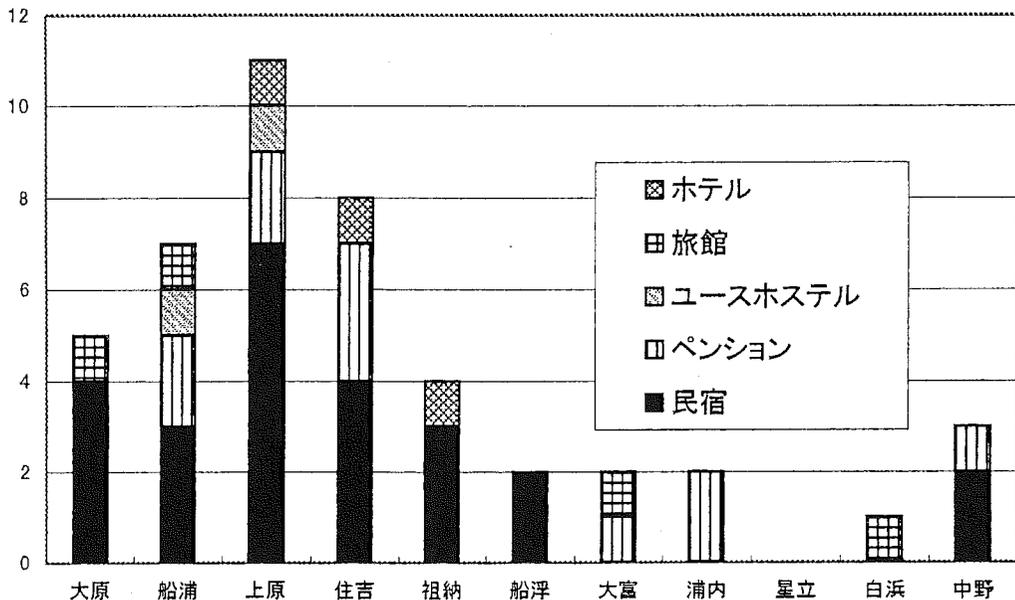


図2 年別宿泊施設設置状況図

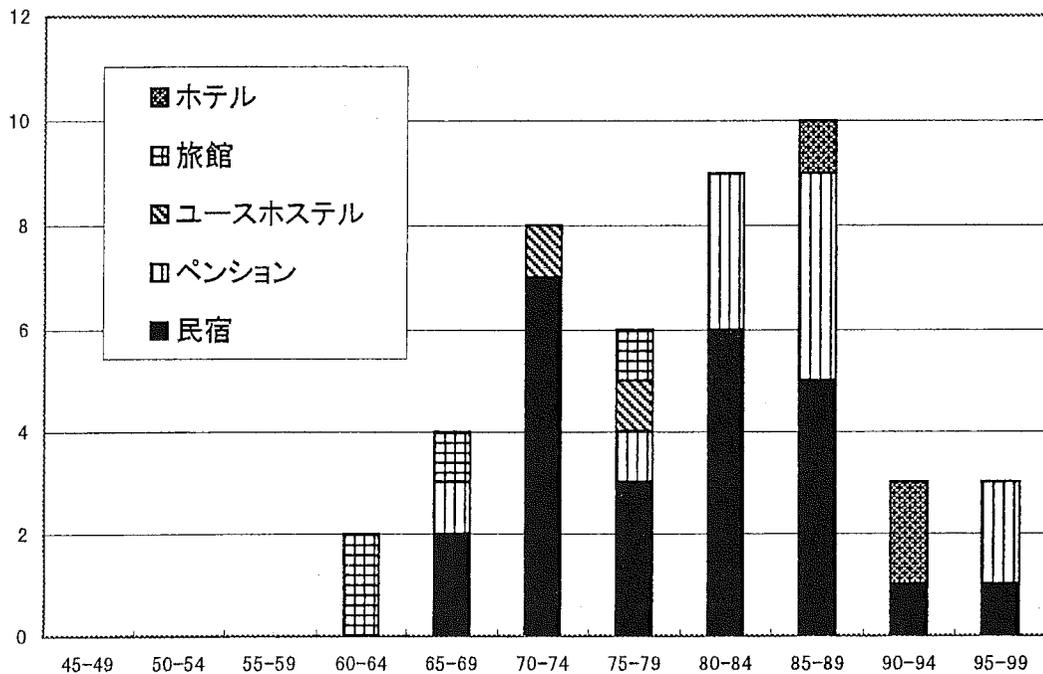
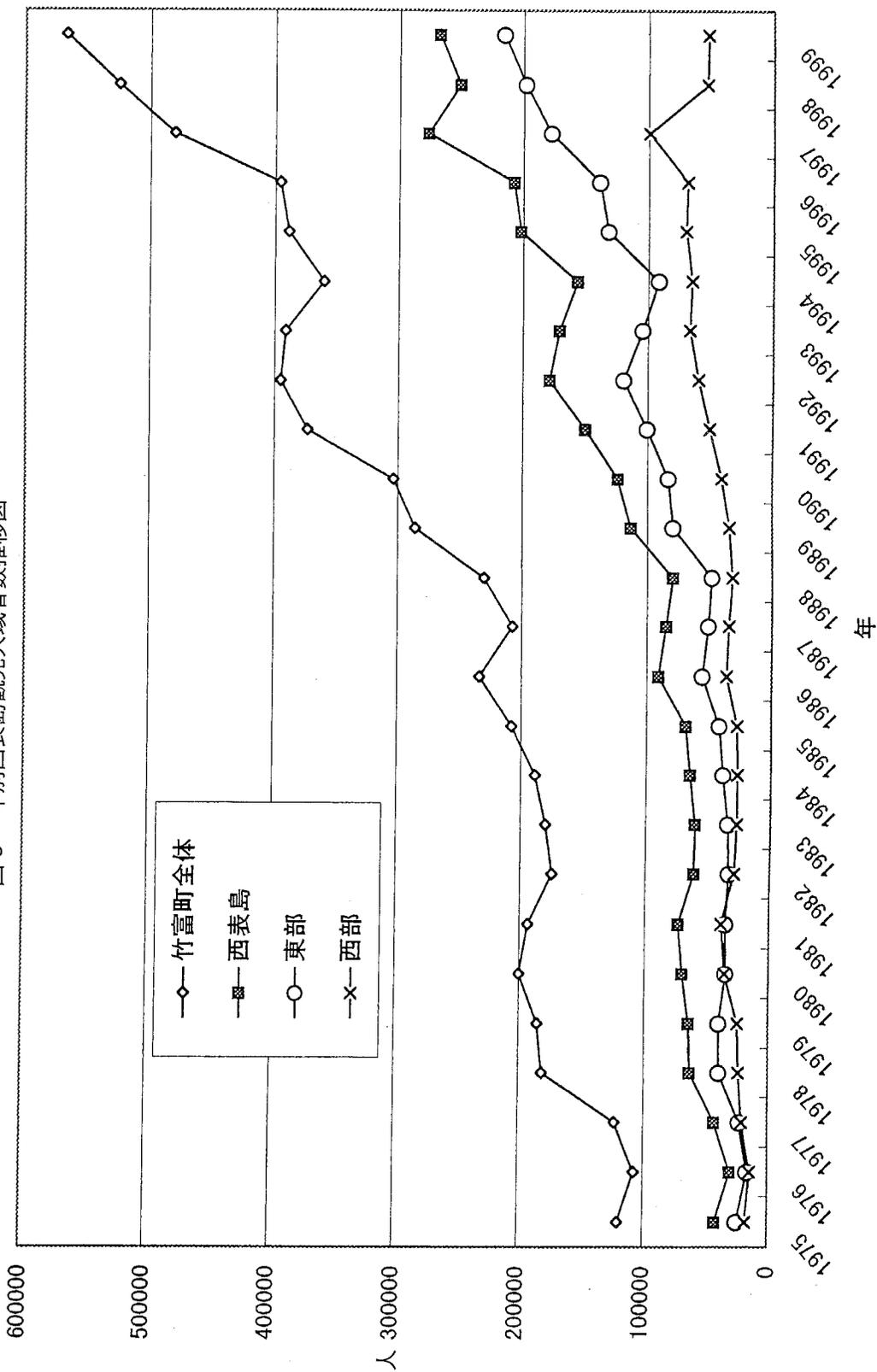


図3 年別西表島観光入域者数推移図



5 観光入域者数と宿泊施設設置の相関関係

竹富町役場企画課提供の資料に基づく統計資料によって作成したのが、図3の年別西表島観光入域者数推移グラフである。統計資料が75年からしかないのが残念であるが、西表島の観光客入域者数は、1975年（昭和50）の42,125人から、1999年（平成11）には267,503人に推移し、25年間で6倍強の伸びを示している。ただし、この観光客入域者数は石垣港から西表島へ渡った乗船者数が基数になっている。生活路線であるため、観光客数をどの程度の比率で算出するかは、モニタリング調査によるものと思われるが、この数値は乗船者数の4割を観光客と規定したものだという。25年間を経過した今日、島民の生活動態の変化や観光客そのものの増加が顕著であることなどの指摘があるため、観光客と島民との乗船客数比率の見直しが検討されているようである。そこでは、従来の観光客比率4割を7割に上方修正する可能性も指摘されている。そのように考えると、1999年を例にとった場合、観光客や島民を含めた西表島航路の延べ利用者数は約66万人で、うち7割を観光客として換算すると、約46万の数値が算出されることになる。

図3では、竹富町全体と内数としての西表島の入域者数、さらにその内数として島内の東部、西部の4つの指標に注目した。竹富町は9つの有人島があるが、統計の対象となっている島は、竹富、西表、小浜、黒島、波照間、鳩間、新城（土地）の7島である。そして、これらの島には石垣間で定期船が就航しており、各島1海港で対応している。ただし、西表島の場合は東部・大原の仲間港、西部の船浦港があり2港となっている。

西表島の観光入域者数は、75年の統計開始以来順調に増加傾向にあることがわかる。その線と同調して東部大原の仲間港の利用者数も増加している。一方、西部の船浦港はほぼ横這い状態になっている。これは、船浦港が北風の影響を受けやすく、10月から3月にかけての6ヶ月間、定期便に欠航が相次ぐためである。この指標は東部と西部の港の利用者の傾向を把握するために呈示した。

さて、ここで西表島観光における観光客の動態について検討しなくてはならない。同島の最大のみどころは、秘境といわれる大自然にある。観光の主要目的はダイビング、登山、川遊覧、動植物の研究などといったものといわれる。

西表島観光にとって、もっとも大きな障害は観光客が石垣島を拠点として動く旅行形態にある。石垣島は、八重山諸島の海上交通の要所であり、大規模資本によるホテルなどの宿泊施設が整備され、交通・生活の上でも利便性が高い地政的特性を有する。したがって、個人客を除く、団体客は利便性の高い石垣島を拠点に動く旅行形態をとらざるを得ない状況が生じる。従来、西表島観光は石垣島からの「日帰りツアー」として位置づけられてきた経緯がある。その背景には、観光客を受け入れるための受け皿、すなわち宿泊施設の絶対量の不足があげられてきた。その問題の解消には、観光客の需要に対応する宿所などの

ハード部分と観光産業のソフト部分の確立が急がれていたのであった。

復帰後の西表島観光は、受け皿づくりである宿泊施設の整備により、日帰りツアー形態の解消を図ることが当面の目標として掲げられてきた。そのことが今日のような宿泊施設の増加につながった一因である。しかしそれでも、宿泊施設の1カ所あたりの収容能力の限度などにより、この問題は十分な解消にいたっていない現状があり、依然として石垣島を拠点とする八重山観光の本流は変わらない。

6 西表島のエコツーリズムの実践

今回調査対象とした宿泊施設45カ所のうち、半数近くの経営者が島外の人々であった。ある県外出身の経営者は、西表島の魅力についてつぎのように語ってくれた。

20数年前新婚旅行で石垣島にきた。そして西表にも渡った。元々釣りが趣味であったことが、より一層海の虜にしたという。豊かな自然が西表への移住を決意させたという。2年で資金を稼いで、大富集落に移住した。趣味を生かし漁業に従事したという。同集落は戦後大宜味村、竹富あたりからの移住者が多かったことから大宜味の「大」と竹富の「富」を結んで集落名称にしたところであった。多くの移住者によって形成された集落であるため「合衆国」と地域の人々からは呼ばれている。それゆえ、他県出身に対しても同じ移住者の立場で、開放的でおおらかに受け入れてくれたという。土地の人々の相互扶助により随分と助けられたという。そして、土地譲渡の話が舞い込み、土地を求めて簡易宿所営業（ペンション）を営むことになったという。他島とは違う西表島の魅力について、山があり、川があり、海があり、そのすべての自然が豊かであり、人々が素朴で温かいことを挙げてくれた。

また、ある経営者は、中途半端な都会よりは、時代をタイムスリップしたなつかしさがあり、ゆったりした時間の中で「人間らしい」生活感をとりもどすことができる島が西表島であると、移住の動機を語る。

今回調査した宿泊施設に従事する主たる人々は、90人であった。家族経営が主であり、夫婦で従事していることが多い。また、夏季を中心とした繁忙期には、28施設で80人程度の従業員（ヘルパー）を雇用している。定職化を避け、自由業としてのフリーター指向の若者には、大自然の中に身を置き、旅行者感覚で宿泊施設に住み込み3食付きで、若干の日当付の仕事は大きな魅力のようである。ヘルパーの殆どが県外出身者である。民宿に宿泊したり、ヘルパーとして西表島で生活した彼らの先輩の中には再び同島に戻り、民宿を創設している人も少なくない。また、地元の人によって経営される民宿の二代目に西表に魅せられた県外出身者が嫁いでいる事例も少なくない。宿泊施設を通しての西表島の旅行・生活体験が、彼らの人生進路を大きく左右する契機をつくったといっても過言では

なさそうである。このことが西表島の人口を増加させている要因のひとつと考えられる。現在の人口は、2007人であるが、この数値は住民票を伴う数である。ヘルパーの中には住民票を異動しない人々もおり、実態としての人口はその数をはるかに上回るものと思われる。

近年、エコロジーということばが頻繁に用いられる。元来は環境と生物との相互関係を調べる学問である。この用語は、19世紀のドイツの生物学者ヘッケル（1834-1919）による造語である。80年代からは環境破壊や資源枯渇の問題が鋭く認識されるようにいって、この用語は自然科学の領域を越え、人間の生存条件を考える上でも不可欠のことばとなった。観光事業、集合的に観光客をもちいる場合、英語では「ツーリズム (tourism)」ということばを用いる。訪問先（観光地）の自然環境や破壊することなく、その土地固有の自然・生活・文化などの資源を持続させていくような旅行の概念がエコロジカルなツーリズムを意味する言葉として「エコツーリズム」として80年代から欧米で使われるようになった。今日では自然保護と観光、そして地域への経済還元を同時に成立させる新しい旅として、世界的に注目されている。

1996年（平成8）西表島にもエコツーリズムのノウハウを紹介する機関「西表島エコツーリズム協会」が国内で初めて創設された。地元の協会会員は現在39カ所を数える。運送業、飲食業、ダイビング業、土産品業、宿泊業など異業種間の結合である。地域興しのユニークな活動実践などが認められ1999年度（平成11）の「地域づくり自治大臣表彰」を受賞した。

同協会が発行した『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥ西表島エコツーリズム・ガイドブック』には、エコツーリズムの体験の方法が次のように記される。

傷つけることなく自然と親しむ方法を土地の人に聞くことからはじまります。どの地域にもそれぞれ、自然と接し方を示すルールがあります。入っていい場所、採っていいもの、歩き方、触れてはいけないものなど、土地の人々が自然と関わってきた歴史の中で得た知識の結晶がある。それらルールを知り、尊重して行動することがエコツーリズムの第一原則です。

同書は、エコツーリズムは地域固有の自然環境、そこに生きる土地の人々の文化や歴史を追体験して共有するための謙虚な姿勢と尊敬の念で接することが肝要であることを語っている。

7 まとめにかえて

筆者が西表島を訪問したのは、今回で3回目である。1回目は20年ほど前の学生時代であった。その時は、山中のホールのような施設を宿として、集団行動の中で浦内川の散

策を経験したように記憶している。2回目は1995年（平成7）で、県教育委員会の「県内所在染織調査」事業の一環で西表島の古い集落である古見や星立、祖納に伝わる無形民俗文化財に関わる衣裳や舞台幕などの調査で伺った時である。星立集落では、戦前製作されたと思われる日章旗がクロスで描かれた紅型舞台幕が確認できた。しかし、この幕は日章旗部分が墨消しされていた。戦前の教科書の墨消しは聞いたことがあるが、舞台幕の墨消しは初見であった。戦前から戦後にかけての歴史的価値感の転換を語る重要な歴史資料といえるものである。祖納、星立集落には、1991年（平成3）に国指定重要無形民俗文化財に指定された伝統的祭祀「節祭」がある。確かその時は、日帰り石垣島に宿を取ったと記憶している。

そして今回初めて西表島の民宿を体験した。同時代的で観光ガイド資料になりがちであるが、西表島の戦後宿所の実態を記録したいと思ったことが本稿の目的である。西部地域が民宿が多いので、古くて、その土地に詳しい主が経営する民宿に宿をとった。私が訪ねたのは1月中旬で閑散期ではあったが、その民宿にはヘルパーが男女1名ずついた。2人とも県外出身者で男性の方は2年ほど従事しているとのことで、将来は西表島居住の夢を抱いていた。もう一方の女性は、関東の出身で3月までを過ごすとのことであった。約6ヶ月間の雇用であったようだ。

①西表島における民宿の社会的役割

西表島の宿所を代表する民宿とは、「一般民家が許可を得て副業的に営む簡単な宿泊施設のことで、安い宿泊料で家庭的なサービスの特徴とする」施設と規定される。民宿は本来が民宿業であったのではなく、冬季のスキー場や夏季の高原、海水浴場などで宿をとれなかった利用者側が、一般民家に頼み込んで一夜の宿を借りる形から始まったことから民宿という呼称の由来になった。それが、その家庭的なよさを売り物に、専門化して現在の民宿営業が始まった。

今回の調査に基づく限り、西表島では旅館の設置がその他の宿泊施設に先行した。1961年大富に竹盛旅館が戦後最初の本格的な旅館業を始めている。また、西表島の宿泊施設を代表する簡易宿所「民宿」は上原の「うえはら館」が66年の開業という。復帰後、これらの宿泊施設がその後創設される多くの宿泊施設の先導を担った。

西表では現在でも11月15日から翌年の2月15日の4ヶ月間イノシシ猟が解禁がなされる。以前ほどは獲れなくなったようであるが、それでもイノシシ料理が食膳を飾る。今朝とってきたばかりの海の幸が夕食に供される大自然の恩恵がある。西表島の民宿は、その本来的な長所である自家用の新鮮な海の幸や山の幸が食膳に供され、家庭的な宿泊施設として人気をあつめ、島の魅力を伝える媒体としての社会的役割を担っている。また、旅行

リピーターの発掘、あるいは西表島移住への契機を与える機関のひとつとしての機能を有している。

旅行は非日常的行為といわれる。日常からの離脱が旅の大きな魅力である。が、旅の持つもうひとつの魅力は、人あるいは自然の、一期一会の新たな出会いの可能性にあるかもしれない。その日常にもっとも近い宿所の形態が、民宿やユースホテルといえる。民宿には気取らない島の人々の日常生活そのものがあるからである。旅行者はその日常に触れて、土地の人々との間で一時の歴史的・文化的な追体験を行うことができる。旅行者はその土地に対する大いなる理解者となるのである。宿泊施設のなかで、とりわけ民宿はエコツーリズムの理念を以前から実践してきたといえそうである。そして、旅行者として民宿体験者のうち、島の虜になった人々が再びもどってきて、自ら民宿を創設したりしている。彼らこそは島の風土を愛した意味で、エコツーリズムの達人といえるかもしれない。

現在、西表島の宿泊案内は、インターネットを通じて多くの情報を入手できる。西表島丸ごとの情報が世界中から即座に入手できるのである。旅行者の入域者数は断然増えることが予想される。エコツーリズムのジレンマについて、西表島エコツーリズム協会会長の竹盛洋一氏は「西表島の観光においてマストツーリズムとエコツーリズムのゾーン（エリア）分けが必要である」と語る。大勢に適した観光形態、小回りのきく個人に適した観光の仕方があっていいという。その共存にたいする体制づくりが必要である。

②エコツーリズムと総合的学習

西表島エコツーリズム協会ができて5年の歳月を経たという。エコツーリストの受け皿づくりの目処がつきつつあり、そのユニークな地域づくりの実践が自治省に認められて大臣表彰を受けた。国内で初めてのエコツーリズム協会設立に多くの注目と期待が集まっている。平成13年度からは西表の自然・文化に精通したエコツーリズムのためのガイドの養成を図りたいという計画もある。

竹富町は「日本最南端の大自然と文化の町」を標榜している。自然を保全することが観光の大きな資源であることは自明であるが、それを大切に保全・保護し、手をかけて守り育てていくという理念を持った人々を養成することも「マンパワー」という大きな資源である。そのためには、島の大半を占める国有林を管轄する旧林野庁や自然保護地域を所管する旧環境庁の国の機関をはじめ竹富町、西表島の人々が問題意識をもって議論し、エコツーリズム、マストツーリズムなど旅行者の需要や自らの日常生活を豊かにするための長期的ビジョンを描くマニュアルづくりが早急に求められる。

今日、大量輸送が可能になりマストツーリズムが隆盛を究めている。集団旅行の典型的事例は修学旅行である。しかし、一方で個を尊重したパーソナルツーリズム（注2）があ

り、近年の修学旅行は4, 5名でタクシーを利用し、自由にテーマ設定した修学旅行も増えつつある。

文部科学技術省は平成14年度から「総合的学習」の本格導入を開始する。この学習は教育内容の拘束はなく、学校の実態に即した学習活動の実践を推進することができる。学校現場の教員が自主的・主体的なテーマを設定し横断的・総合的な取り組みが可能になるという最大の利点がある。被教育者である児童生徒は自らの興味や関心に基づく課題を学ぶことができる。また、地域社会にとっても、地域の歴史や文化などの特色を生かし、伝承者や後継者を育成する契機を提供することができる。総合的学習制度に対応した総合的学習版のエコツーリズムの実践例が発表されるのは時間の問題であろう。

③沖縄観光の試金石となる西表観光

沖縄は日本復帰して28年を経た。国の高率の補助事業によって、道路、港湾などの社会資本は充実してきた。これまでに投じられた国費は10数兆円を越える。沖縄県は現在観光産業を県政の重要施策として位置づけ基盤整備を行っている。72年の復帰以後、75年の国際海洋博覧会や国民体育大会などの全国大会の誘致などを通して、沖縄観光は受け皿としての宿泊施設の確保を至上命題として、国内外の大型資本による宿泊施設が整備されてきた経緯がある。『沖縄県福祉保健行政の概要』等の資料に本県に登録される宿泊施設数は表3のとおりである。

表3 沖縄県の宿泊施設状況

	ホテル	旅館	簡易宿所	総計
2000年 (平成12)	252軒 室数 (20,597室) 収容 (49,717人)	810軒 室数 (10,241室) 収容 (24,724人)	522軒 室数 (3,110室) 収容 (12,875人)	1,585軒 室数 (33,948室) 収容 (87,321人)
1977年 (昭和52)	129軒 室数 (———) 収容 (20,951人)	832軒 室数 (———) 収容 (21,200人)	348軒 室数 (———) 収容 (10,975人)	1,309軒 室数 (———) 収容 (53,126人)
1972年 (昭和47)	50軒	820軒	27軒	897軒

復帰時の1972年と1977年と2000年の3つの年で比較できる統計上の項目は施設設置数しかない。その表3からみると、ホテル件数が復帰当初の設置数50施設から海洋博覧会開催(1975年)後の77年には129軒の2.6倍に増えている。さらに、2000年と比較する

と、28年間で5倍に増加している。旅館の設置に関しては、72年当時の820軒から2000年には810軒と減少している。民宿に代表される簡易宿所は復帰当時の27軒から522軒と19倍の驚異的な伸びを示している。収容人員に注目すると、1972年当時の収容人員を77年の収容人員から類推し、1軒あたり平均収容人員を40人とした場合、897軒で35,000人程度の収容人員であっただろうと推測される。現在の沖縄県における宿泊施設は、復帰当時のその約2.5倍に拡充され、宿泊施設というハード面は一定の確保がされてきているといえそうである。

21世紀はIT時代で、個人はありとあらゆる分野の大量の情報を容易に入手できる時代になる。バーチャルリアリティをどこでも体験することができるのである。そのような時代の中で観光は、人間個人が自らの感性に基づき自然の流れや変化を感じとることができるアナログ的手法でもってのみ体験することができるものであり、決してデジタル化の仮想の世界では経験できないものである。そして、旅行形態は大型化ではなく、むしろ小型化であり、個性化するのではないだろうかと考えられる。マニュアル化されたホスピタリティではなく、宿に息づく生活感からにじみ出るホスピタリティが求められよう。

本稿では戦後の西表島における戦後の宿泊施設の概要をまとめてみた。時代の少子化傾向の中にあって、西表島の人口は今後どのように推移していくのであろうか。21世紀の西表島観光やその受け皿となる宿泊施設はどのような発展をとげていくのであろうか、興味が尽きない。心温まる宿所を拠点にして旅人と自然、そして島の人々との間で育まれる、究極のツーリズム—エコツーリズム。恵まれた自然という資源の保全を図り、土地の人々をはじめ旅人の意識の啓発を図ろうとする西表島のエコツーリズムの試みは、自然・歴史・文化を付加価値とする沖縄観光の成否を占う試金石になる。

謝辞

調査にご協力いただいた西表島の宿泊施設の関係各位及び西表島エコツーリズム協会（会長竹盛洋一）に厚く御礼を申し上げます。また、竹富町企画課、八重山保健所、沖縄県薬務衛生課・福祉保健政策課の資料提供に感謝申し上げます。

注1 『ヤマ・カワ・ウミ・ヒト西表島エコツーリズム・ガイドブック』（1997年・西表島エコ・ツーリズム協会編）111pの関連機関一覧から筆者が集落ごとにまとめたもの。

注2 「マス」（団体）に対比する意味での個人旅行という意味で「パーソナル」ツーリズムという説明用語を用いる。

参考文献

『全国民宿ガイド』日本交通公社出版事業局編

『最新民宿ガイド』山と溪谷社編

『ヤマ・カワ・ウミ・ヒト西表島エコツーリズム・ガイドブック』1997年 西表島エコ・
ツーリズム協会編

『日本交通史概論』大島延治郎 1946年 吉川弘文館

「旅館」佐々木日嘉里『日本大百科事典』2001 小学館

『町制施行50周年記念平成10年度版竹富町制要覧』1999年 竹富町役場

『福祉保健行政の概要』（平成11年版）2000年 沖縄県福祉保健部